

ピーマンづくりも
家族との暮らしも、
スタートラインに立ったところ。



佐藤宏哉は平成元年生まれ。吉良川町でピーマン農家の長男として育った。父はハウス農家だが、露地での農業も知ろうと、東京農大農学科に進む。

「子供の頃から手伝いをしていて農業が好きでした。大学選びの頃には、自然に後を継ぐ気持ちが固まって」。

4年間で、全国の農地・土壌・地形について詳しく学んだが、世界ジオパークにも認定された故郷の豊かさにはかなわないと思った。だから、室戸に戻ることにためらいはなかった。

学生時代に知り合った妻との間に、この春、娘が誕生。若いお父さんでもある。

作る品種は、型がよく色も鮮やかな「トサミドリ」。「技術も経験もまだまだだけど、エコ農法に取り組んで、あれこれ工夫したことが収量につながるのがうれしい」。

物静かな若き農業家は、ピーマンのことになると熱い。

自然相手なので、基本、休みはない。酒もつきあい程度。まじめを絵に描いたようとは、まさに。

ピーマンづくりも家族との暮らしも、スタートラインに立ったところ。未来ははっきりと見えているわけではないが、じっくり粘り強く前に進もうと思う。そう、平坦な道ばかりでないコースを走るマラソンで、ゴールを目指すように。

ピーマン農家
佐藤宏哉

室戸じと、
進む。